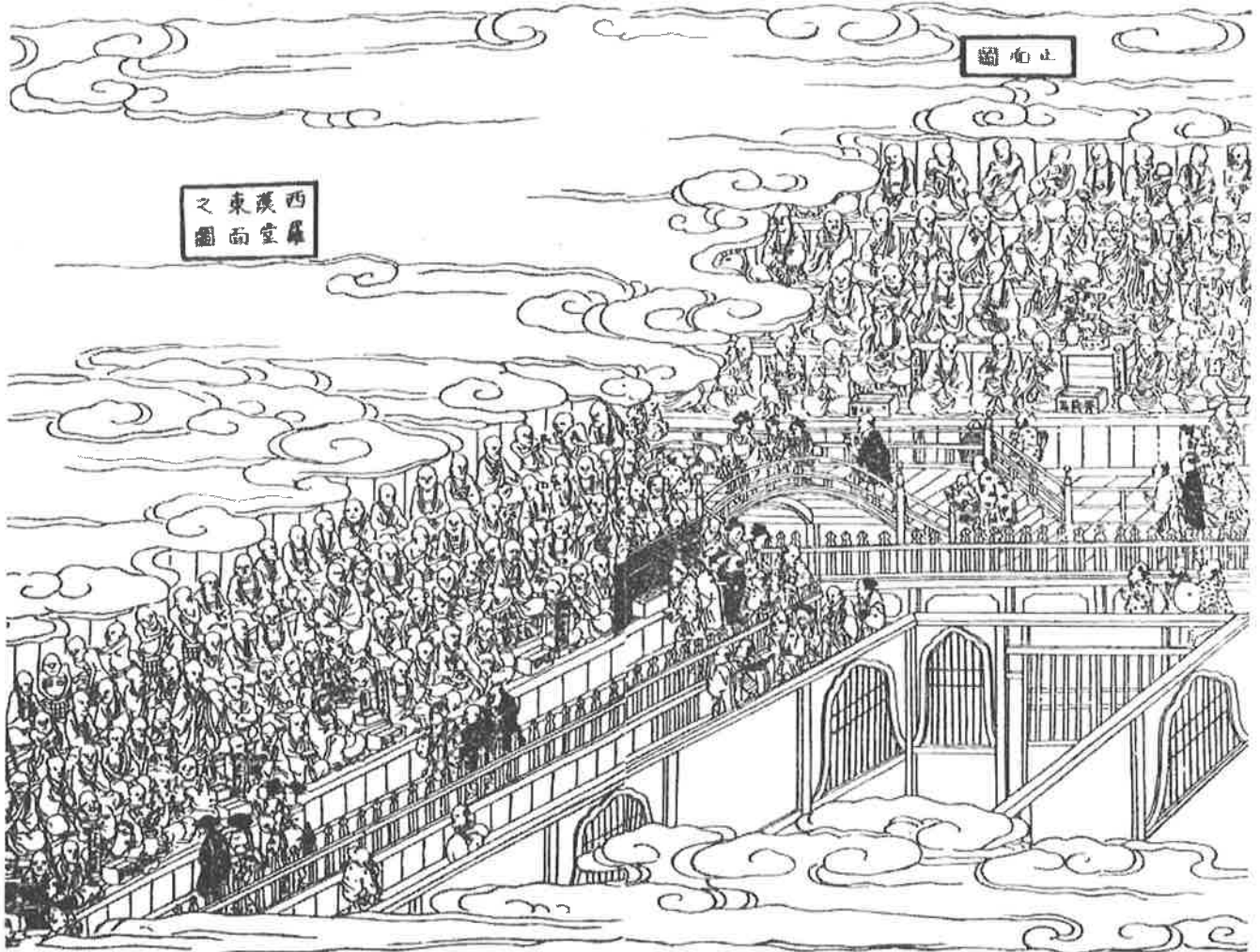


## 江東の名所 ①

## 江東地域の埋め立てと江戸名所の成立

江東区深川江戸資料館



五百羅漢（『江戸名所図会』天保7年〔1836〕刊行 長谷川雪旦画）

江戸時代初頭、まだ海岸の湿地帯であった江東区域に、何人かの開発者がやって来ます。深川村の開発者深川八郎右衛門、砂村新田の開発者砂村新左衛門らの名を挙げることができます。はじめは農地でしたが、これら新しい土地の中に点在した寺社や風光明媚な土地は都市化が進んでも残り、次第に注目されるようになって、やがて、多くの人が日帰りの行楽に訪れる「江戸名所」となっています。

今号から6回に亘って、江戸の人々に愛された江東の名所をみていくことにしましょう。

## 名所案内本の変遷に見る 江戸名所の確立

江戸時代よりも前、「名所」の文字は、「などころ」

と読み、歌に詠まれる地名のことをさしていました。いっぽう室町時代には、大都市ではないが、農村とは明らかに異なる人や物の流入があるというような所のことを指す「都市的な場」の発展が顕著になってきます。交通の要地であった浅草寺周辺などがその好例です。江戸幕府が誕生すると、江戸への人口の流入に伴って、このような「などころ」「都市的な場」を起源とする中世以来の盛り場のほか、新しい名所が生まれます。

この時期の江戸名所の案内書として、『あつまめくり』（原題『色音論』著者を記さず、寛永20年〔1643〕京都で刊行）があります。

寛文2年〔1662〕刊行の『江戸名所記』は、『あつまめくり』に比べ地誌としての内容は整っているといわれますが、両者とも京都での刊行であって、江戸に住む人でなく、京都で、物語を通じ、遙かな江戸の地を



春秋彼岸の亀戸常光寺六阿弥陀詣（『江戸名所図会』 天保7年〔1836〕刊行）



深川神明、泉養寺（『江戸名所記』 寛文2年〔1662〕京都で刊行）

知ろうとする人を対象として書かれた<sup>かなぞうし</sup>仮名草紙です。

これに対し、1677(延宝5)刊行の『江戸雀』は、江戸での出版であることが注目されます。その叙述は、地図を説明しているようで、物語として展開していく仮名草子の名所記とは明らかに違い、実際に行こうとする人を対象にした道案内であるといえます。

このようにして江戸の名所を案内した本を見比べてわかることは、延宝年間(1673~1680)をまわって初めて、江戸の人々のものとしての名所めぐりという娯楽の一ジャンルが確立したといつてよい、という点でしょう。

## 江東の名所の特色

この頃の江東の地は、江戸の市街から隅田川を渡ってきた一帯に広がる深川の町々と、深川から小名木川に沿って東へ進み中川と合流するまで武家屋敷と農地が続く、いわば近郊農村とから成り立っていました。これらの町や村が次々に成立し、江東区の原型ができあがったのは、元禄年間(1688~1703)のころ、といわれています。前章で述べた「江戸の人々のための江戸名所案内本が刊行されるようになった時期」と同じころです。このことは、江東の名所の特色を語るのに欠かせない要素です。この新開の土地は、海に近くて温暖なうえ、<sup>ひな</sup>鄙びた田園の景観の残る場所でした。しかも、江戸の市街から日帰りできる距離にあり、富岡八幡宮、永代寺、深川寺町の寺々、大島の五百羅漢寺、砂村の持宝院、亀戸天神、竜眼寺、梅屋敷と点在する寺社と花々、木々は、大いに人々をひきつけました。

## 行動文化と名所

江戸時代の半ばを過ぎ、宝暦~天明(1751~1789)のころになると、江戸町人の間に華やかな文化が花開きます。それらの特色のひとつは、「行動文化」とよばれます。芝居見物、芸能や稽古事、<sup>けいこごと</sup>外食など、「行動

することそのものを文化現象とみる考え方です。名所めぐりもそのひとつであったことは、いうまでもありません。寺社を中心に、その境内や周辺に発達した名物料理などの名店で、参詣と、飲食をあわせて楽しむことが江戸っ子たちのブームとなりました。近くに樹木や花の名所があれば、それもあわせ一日コースの行楽になりました。舟で行く<sup>ふねい</sup>風情は、また格別であったようで、小名木川沿いには、舟から下りて寺社に向かう道を示す道標が残され今に伝えられています。江東の地は、この時期を経て、行楽の地として飛躍的に発展しました。

## 『江戸名所図会』の刊行と江東の名所

文化文政(1804~30)は、宝暦~天明のころ花開いた江戸の町人文化がピークを迎えた時期です。この時期から幕末にかけ、名所を描いたさまざまな絵入りの出版物が江戸で出されています。その代表格は、神田の町名主齋藤幸成(月岑)<sup>げつしん</sup>が祖父・父の遺志を継いで3代に亘る編纂事業を完成させ、天保7年(1836)の刊行で完結した『江戸名所図会』7巻20冊です。同書は、<sup>せつたん</sup>絵師長谷川雪旦による358点の絵が収録され、「目で見ると高く評価されていますが、内1割を超える37点が江東の地を描いていて、月岑はじめ江戸市中の人々の東郊の名所への関心の深さが知られます。

江戸時代はじめの寛文2年(1662)京都で刊行された『江戸名所記』では、江戸全体の80の名所が挙げられている中で、江東の地では深川神明宮と永代島の八幡宮の2箇所が収録されているにとどまります。刊行に170年の差のある2つの地誌を見比べると、江東の地が、江戸の発展とともに広がり、江戸時代中期以降に、東郊の行楽の地として注目されるようになっていった様子がよくわかります。

次号から、江東の名所を具体的に紹介していくことにします。